コロナ禍の再考で、最高の博物館講座を!

～鉄砲館キッズコンシェルジュ養成講座～

鹿児島県　西之表市

西之表市は、1543（天文 12）年に起きた「鉄砲伝来」で知られる「種子島」の北部に位置する人口約 15,000 人のまちである。

教育委員会は、総務課・学校教育課・社会教育課の 3 課で組織され、そのうち社会教育課には、社会教育係、生涯スポーツ係、文化財係の 3 係がある。今回は、文化財係が取り組む『鉄砲館キッズコンシェルジュ養成講座』について紹介する。

1. 種子島開発総合センター「鉄砲館」

（1）施設概要

種子島開発総合センターは、昭和 58 年に開館した博物館類似施設である。国内外の古式銃（火縄銃やライフル銃）約 100 挺の展示や、鉄砲伝来物語の回転ジオラマが展示のメインであり「鉄砲館」の愛称で親しまれている。

その他の展示充実にも努め、約 130 万年前の象化石をはじめ、県指定文化財 4 点、市指定文化財 20 点を含む約 1300 点の常設展示と、1 ～ 2 か月で入れ替わる企画展を行っている。

種子島の自然・民俗・歴史・文化などを総合的に知ることのできる博物館として、教育施設の役割だけでなく、年間約 3 万人が訪れる観光施設としての役割も担っている。

▲異国船をイメージした外観の鉄砲館

（2）コンシェルジュの配置

鉄砲館の入館者数は、開館 20 年目となる平成 15 年度（60,571 人）をピークに減少傾向となっていた。要因は様々だと思うが、鉄砲館としても何かしらの工夫が必要であると感じていた。展示充実に努める一方、団体ツアーなどは滞在時間が短く、どこまで理解してもらえているのか、満足してもらえているのか、という不安を感じていた。

その状況を打破するため、平成 22 年度、国の緊急雇用創出事業を活用し 4 名の案内係を配置した。鉄砲館コンシェルジュの誕生である。

鉄砲館ガイド奮闘

種子島 ブログ、チラシでPR

入館者減の歯止めに期待

種子島有数の観光スポット、西之表市立種子島開発総合センター（鉄砲館）で初めた4人の女性ミュージアムガイドが奮闘している。展示の説明だけでなく、記念撮影にも対応。ブログ（日記風サイト）を立ち上げ、西之表港でチラシ配りをするなどPR入れる。同館は「入館者減少に歯止めがかかれば」と期待している。

館内展示や種子島の歴史についての学習を積み重ね、来館者の滞在時間に合わせた 30 分～ 60 分の案内は、団体客を中心に好評を得た。案内のほかにも、記念撮影や観光地紹介、飲食店マップ作り、ブログやチラシでのPRなど、少しずつ活動の幅を広げ、鉄砲館の魅力を高めた。入館者は、平成 24 年度に過去最低（19,097 人）を記録したものの、平成 25 年度から 6 年連続して増加し、見事にV字回復となった。

2. 鉄砲館キッズコンシェルジュ

（以下、養成講座受講生を「キッズ」と記載。）

（1）講座開始のきっかけ

鉄砲館の入館状況は、春・秋シーズンは団体客が多く、夏場は個人客が大半を占める傾向にあった。もちろんコンシェルジュは個人案内にも対応していたため、館内 1 周短くても 30 分程度を要することから効率は良くなかった。そこで平成 23 年度に発案されたのが、夏休み期間の「鉄砲館キッズコンシェルジュ養成講座」である。以前から、地元の子供たちの学びを伸ばす取組を考えており、館内案内の充実も図られる一石二鳥の講座としてスタートした。

【目的】
・地元の子供たちの学びを伸ばす
・学びを活かした案内体験
・館内案内の充実
【手法】
対象：小学4年生～6年生
期間：1か月程度
内容：案内マニュアルの内容を覚える。
案内スキルを身に付ける。
（ 動き・立ち位置・移動ペースなど ）

（2）1か月の長期講座

長期講座で、しかも人前で話すという講座内容であり、初年度は 3 名の受講であった。しかし、この勇気ある 3 名のキッズで十分だった。初めての取組に、スタッフも手探りの部分が多かったからだ。当初作成した 15 ページほどの案内マニュアルは難しすぎると分かり、キッズの意見を踏まえながら見直した。案内体制や待機場所についても試行錯誤を行った。

キッズ案内の取組は学校内でも話題となり、5 年目の平成 27 年度には受講者が 30 名にまで増えた。嬉しい悲鳴となったが、さすがに1度には多すぎるため、3 班に分け、3 日に 1 度の受講とした。これ以上の増加は厳しく、28 年度は 15 名定員で募集したが、結果 20 名で実施した。29 年度以降は、15 名定員に収まった。

キッズ案内は、マニュアルに基づくコース順に、館内 1 周を 40 分程度で巡る。事前にスタッフが来館者に声をかけ、「キッズ案内」の趣旨をご理解いただいた上での案内となる。もちろん案内スキルに個人差はあるが、どのキッズも夏休み後半になると立派な案内係に成長する。ツアー会社の中には、最初からキッズ案内を希望し、事前予約を入れる会社があるほどの人気ぶりであった。

▲オリジナル T シャツを着用して案内するキッズ

受講者数（男女）と年間入館者数（コロナ禍以前）

年度	男	女	計	入館者数
H 23	0	3	3	24,418
H 24	1	4	5	19,097
H 25	2	8	10	21,867
H 26	6	20	26	22,108
H 27	5	25	30	23,622
H 28	2	18	20	25,317
H 29	7	7	14	29,650
H 30	5	6	11	29,788
R1	8	6	14	28,308

3. コロナ禍の再考

（1）臨時休館と行事中止

令和元年 12 月に初めて確認された新型コロナウイルス

感染症は、あっという間に世界中へと広がった。日本では4月に全都道府県に「緊急事態宣言」が発令される状況となり、鉄砲館も4月19日から5月31日まで、43日間の臨時休館となった。

再開後の6月以降も、市内で開催される様々なイベント行事の中止が相次いだ。鉄砲館でも通常のコンシェルジュ案内が停止となり、キッズ養成講座も中止の判断が妥当な状況であった。

(2) 前向きなスタッフとの意見交換

9年続けてきたキッズ養成講座。中止の判断は、コロナ禍で仕方のない事と思いながらも、前年度の閉講式で「また受講するからね」と言っていたキッズの顔が浮かぶ…。中止を決定するにしても、スタッフの意見を聞いてから決めようと思い、意見交換を行った。10年目の節目ということもあり、スタッフは前向きだった。**何かやれる方法があるはず！** これまで築いてきたスタイルを、どう変えれば安全に実施できるのか検討を重ねた。

来館者との接触リスクを減らせるのか?
→ 来館者へのキッズ案内は行わない。

案内しなくて養成講座が成り立つのか?
→ キッズ案内の練習は行う。

練習成果の披露は誰に?
→ スタッフ相手に発表会を行う。

期間は?
→ 短期集中。2日間で行う。

2日間は案内練習だけか?
→ 館外活動、街歩きに取り組む。
→ ふるさと歴史散歩看板を活用する。

雨が降ったらどうする?
→ 缶バッジ製作なども取り入れる。
→ 文化財を題材にしたものが良い。

何名受け入れる?
→ 1回あたり10名以下が良い。
→ 2日コースを、夏休み中に3回実施する。

(3) 短期講座の試み（令和2年度）

様々な見直しの結果、令和2年度は次のスケジュールで実施することとなった。

【1日目】

9：00	開講式
9：15	コンシェルジュお手本披露
10：00	キッズ案内練習①
12：00	昼食（お弁当）
13：00	街歩き①
15：00	星砂探しなど
16：00	帰宅

【2日目】

9：00	キッズ案内練習②
9：15	街歩き②
10：00	昼食（お弁当）
12：00	缶バッジ製作など
13：00	キッズ案内（発表会）
15：00	閉講式
16：00	帰宅

6月中旬、学校を通じて募集チラシを配付し、7月上旬の締切とした。結果、市内6校28名の申込があり、他校児童との交流も期待できる申込状況となった。1回目10名、2回目13名、3回目5名と第1希望日にバラつきが出たが、様々な人数をスタッフが経験することも大事と考え、全員第1希望日での受講とした。

まず心配した天気だが、3回とも晴天に恵まれ、スケジュール通り進めることができた。

案内練習は、これまで1か月かけていた内容を、2日間でマスターすることは難しいと分かっていたので、4～5名のチーム活動とした。発表会に向けた練習から、誰がどのコーナーを案内するのかなどの役割分担までチームでの話し合いに任せた。初対面や異年齢を含むチームということもあり、緊張しつつも互いの意見を尊重し、協力して取り組む姿が多く見られた。これまでの長期講座では仲良くなる一方で、もめ事もあったので、そう考えると短期講座は、良い距離感のうちに講座を進められることが、メリットに感じられた。

また、チーム対抗の発表会は、自然と良い意味での競争意識が芽生えていた。

▲コンシェルジュによるお手本披露

▲スタッフを来館者に見立てた発表会

案内以外の取組では、市街地の文化財を巡る「街歩き探検」をゲーム感覚で行った。1日目はクイズラリー。2日目はワード探し。暑い中で汗びっしょりの活動となった。この街歩き探検で気付いたことは、「館内で上手に案内できる=内容を理解している」ではないということだった。案内練習の中で何度も名称を口にしている文化財を目の前にしても、これ何だろう?という表情をするキッズ。改めて説明することで、ようやく案内マニュアルの文言と実物が結びついた様子。これは子どもたちが悪いわけではなく、理解しているものと思い込んでいた私たち大人の認識が甘かったのだと、大きな反省事項となった。

また、街歩き探検を終えたキッズからは、「楽しかったけど、疲れた。」という感想が多く聞かれた。スタッフからも「2日目は、午後の活動もあるので、体力的にきつい。集中力が欠ける要因になる。」との意見があった。

▲身近にある文化財を巡る「街歩き探検」

(4) 更なる再考（令和3年度）

長引くコロナ禍、令和3年度も講座は実施できるものの、やはり短期講座となった。昨年度の反省を活かし、次の改善を行った。

【改善点】
・体力を消耗する「街歩き探検」を減らす
・キッズ案内の練習を増やす
・館内で出来る体験活動を増やす

改善点の3つ目「館内で出来る体験活動を増やす。」は、埋蔵文化財業務で行っていた『動物骨の同定作業（どの動物のどの部位なのかを調べる）』が候補に上がり、検討を重ねた。

内容は難しくないか?
→ 動物骨と図面を照らし合わせる作業は、分かりやすい骨を多く入れる。

骨を触ることを嫌がらないだろうか?
→ ゴム手袋を準備する。

資料（動物骨）の破損は心配ないか?
→ 丁寧に取り扱うよう指導する。

時間は?
→ 観察して絵を描くので、60分は短い。
→ 集中力を考えると長くても90分程度か。

更なる再考を重ね、令和3年度のスケジュールは、次のとおりとなった。

【1日目】

9：00	開講式
9：15	コンシェルジュお手本披露
10：00	キッズ案内練習①
12：00	昼食（お弁当）
13：00	キッズ案内練習②
15：00	**街歩き探検**
16：00	帰宅

【2日目】

9：00	**体験☆動物考古学**
10：30	キッズ案内練習③
12：00	昼食（お弁当）
13：00	缶バッジ製作など
14：00	集中タイム
14：15	キッズ案内（発表会）
15：30	閉講式
16：00	帰宅

反応が心配された「体験☆動物考古学」は、講師から「遺跡の動物骨から分かること」を学んだ後、本物の動物骨に触る「同定作業」に取りかかった。嫌がるキッズはおらず、90分間フルに集中して取り組む姿が見られた。1つ目の骨で同定作業のやり方を覚えると、次から次に他の骨に挑戦し、5つもの骨の同定に成功したキッズもいた。

▲動物骨を手に、細部まで観察し記録を行うキッズ

▲抵抗なく動物骨を選ぶキッズ

体験☆動物考古学の大成功の半面、反省もあった。「今回に限らず、様々な講座を検討する中で、難易度や興味、安全性を心配し過ぎて、誰もが出来る内容にハードルを下げていないだろうか。」というものである。

ギリギリできるか、できないかを見極め、少し高い目標を定めることが大事である。また、失敗から学ぶことも多くあるので、過保護になり過ぎず、安全面が確保されていれば、失敗することを良しとする体験活動も、時には大切だと感じた。

受講者数（男女）と年間入館者数（コロナ禍）

年度	男	女	計	入館者
R2	13	15	28	14,467
R3	11	12	23	13,544

4. 今後の展望

まだまだコロナ禍にあり、活動の実施判断に迷う日々が続いている。だが、今回紹介した「鉄砲館キッズコンシェルジュ養成講座」は、コロナ禍の再考があったからこそ、多くの発見と新たなスタイルが生まれた事例である。通常、長年続いている安定した取組に、大きな変化を求めることは少ない。講座自体の中止を選択していれば、コロナ収束後の再開は、再び同じように長期講座をしていただろう。なぜなら長期講座には長期講座の良さがあるからだ。

では、今回の経験を通し、今後の展望をどう考えるか。令和4年度は、すでに短期講座での実施を決めた。この先、完全にコロナが収束したら、短期講座（2日）と中期講座（1週間～10日）の両方をやってみたい。短期講座は初級編であり、楽しみ優先で良い。中期講座は、まだ具体的発想は無いが、調べる力や考える力を育む取組を、何かしら交えたいと思っている。

今ただ1つ明確なことがあるとすれば、これから先も、まだまだ『最高の博物館講座を目指す楽しみ』が続くということだ。